

「くすの木のみなさんへ」

一何のための視覚支援？子どもたちと創る視角支援ー

NPO（特定非営利活動法人） ゆめ

竹上 道邦（元特別支援学級担任）

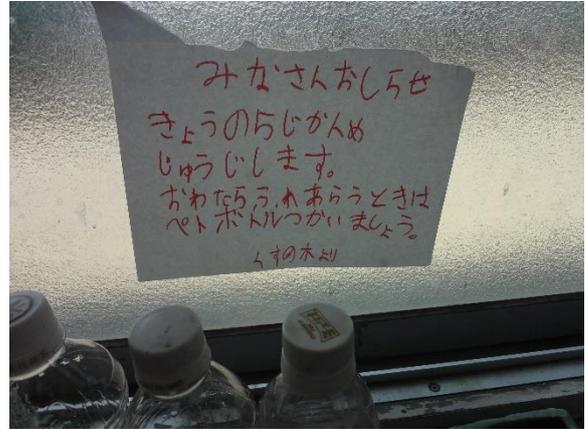
「くすの木のみなさんへ」

学級の教室の蛇口のそばにHくんがこんな張り紙をしてくれました。かたづけの時に、みんなが失敗してよく怒られるからです。

Hくんも、「またやってしまった バカバカ」と頭をたたいたり、先生のちょっとした注意の言葉にキレたりすることも・・・

発達障害の子どもたちは「ちゃんとしたい」「まちがってはいけない」と思っているけれど、つい行動に移してしまい、失敗することも多いように思います。

『困った!』を抱えているのは、子どもたち自身なのだろうと思います。



特別支援学級では毛筆に取り組んできました。いろんな字や絵を筆で書き、楽しく遊んでいます。それぞれ味のある表現、いい漢字（感じ）が生まれます。

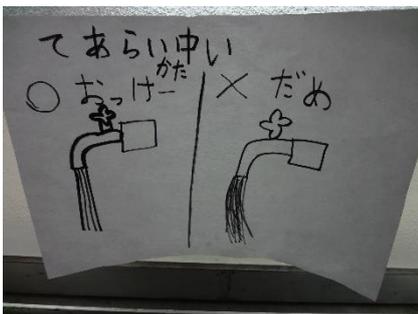
道具を自分で用意して、姿勢を正して・・・墨を扱うのは本当に大変で、まわりを汚したり、失敗も多く、『注意』の飛び交う、バタバタの授業になってしまいます。

そんな授業場面では、視角支援を工夫します。

注意深く聞くことの苦手な子どもたちには、何をすべきか理解ができず、「〇〇しなさい」「〇〇はダメ」と否定や指示のことばかりになってしまうからです。準備が間違いなくできるように、モデルの写真を掲示したり、手順の絵を示したり・・・子どもたちはそれを見て、行動できるようになるのを待ちます。

よく使われるそんな視角支援ですが、最近、気になることがあります。子どもたちの思いや意欲を無視して、「次はこれ」「できたら〇」と、問題なくうまく動かすための一方的な支援者の道具になっていることはないのだろうかということです。視角支援が子どもたちからのコミュニケーションを細らせることになってはいないのだろうかということです。

コミュニケーションは、伝え合いです。意欲や思いを育て、伝え合いを助け、共有・共感できるそんなものにしていきたいと思います。



Hくんの作ってくれたカードに感動です。みんなのために作ってくれた視角支援。学級の子供たちは、よく絵を描きます。

自分の発表、伝言、わすれないように、そこいらにペタペタ張るのがはってしまいました。